

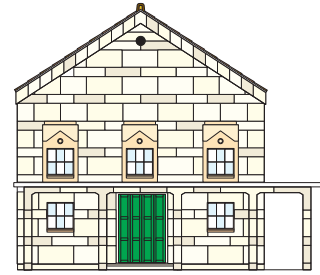
Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2019-08-01

# APM news 216

秋山孝ポスター美術館 長岡

国の登録有形文化財・長岡市都市景観賞受賞・金庫扉と雁木のある美術館



第45回美術館大学 5月11日(土)pm3:00~4:30/参加者:30名/講師:秋山孝

「秋山孝の神秘『考える技術』『表現する技術』について」2

〒940-1106 新潟県長岡市内宮内2-10-8  
TEL 0258-39-1233



講演最後の質疑応答で外国人留学生から「そもそも『技術 (technology) 』という言葉は科学的なものを指し、「考える」という動詞に結びつく言葉ではないのではないかと」という意見が出た。私達日本人は違和感なく受け入れていた人が大半ではないだろうか。じつはこの感覚は漢字を使うアジア文化圏ならではのようである。アルファベットは単体では意味を持たず、組み合わせることで言葉を表現する記号でしかない。一方で漢字は、一文字でも意味を持ち、更に複数の意味を持つ言語である。その意味の1つに「擬人化」も含まれる。それ故、言語に「心」が生まれるという。この根本的な感覚の違いも、秋山の表現する技術に大きく影響しているのではないだろうか。

聴講して感じたのは、「『考える』ことから始まる。」ということだ。創作に取り組むにあたり、秋山は1つのテーマに対して多くの「考える」を行なっている。その切り口は様々で、その為には多くの情報、知識を要する。それは勉強して得た知識だけでなく、幼少期の思い出などの体験による記憶や秋山独自の想像世界であったりと多岐に渡る。その量が多ければ多いほど考える内容の幅が広がる。秋山の頭の中はたくさんの引き出しで埋まった書棚のように感じられるのだと思う。ある事について考える際に1つの引き出しを引く。その引き出しを閉じると、関係する別の引き出しがスッと開く。その関係性がとても重要であると秋山は語る。それはまるで詩の行間を読むような感覚に似ているという。そして、何より大事なことは「考えきる」ということだ。考え切ったその先に新たなものが見えてくるのだ。それが秋山が身につけた「考える技術」と「表現する技術」なのであろう。

今回の研究を機に、これまで無意識であったものが、意識されるようになった。新たな表現の地平を見出した秋山から生み出される作品の更なる進化が期待される。(たかだみつみ・APM学芸員)